
子猫さんと狼さん

雪野 椿姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫さんと狼さん

【Nコード】

N8205P

【作者名】

雪野 椿姫

【あらすじ】

レイカ、アオイの女子二人とケイ、ルイの男子二人の仲良しの四人・・・

「冬休みに四人でイベントをしよう」ということになり、「季節はずれの肝試し」を実行することに

だが、静かで影のうすい不思議なクラスメイトのセイラはなぜか止めようとするそしてセイラは止めるべく話を始める

この話は「肝試し」を警告するセイラが語った長い長い話・・・

ブローグ

200X年12月29日

「ええー・・・新しいニュースが入ってきました」

とても緊張した雰囲気の中、TVニュースだった・・・

「今日未明に20代と思われる男性の遺体が見つかったようです。

死亡推定時刻は昨日の9時以降から12時あたりと見られています。

死因は青酸カリによるもので警察は何者かによる殺害事件と見て捜査を続けています。」

次の年の1月24日

「新しいニュースです。」

数年前の12月29日のニュースと同じように緊張した雰囲気だった

「今日未明、20代男性と10代から20代前半と思われる女性の

二人の死体が見つかりました。その二人の男性は、拳銃による射

殺で、女性は、数年前の事件に使われたものと同じと見られる青酸

カリによる自殺のようで

」

1 An event of the winter (アオイ視点) (前書き)

A test of a courage

1 A n e v e n t o f t h e w i n t e r 〱アオイ視点〱

「ああ〱ダルイ・・・」

レイカとケイの二人の声がハモっていたからつい笑ってしまった

「確かにそうね 今日の授業はちよつとねえ・・・」

いくら勉強が好きな私でも、体が固まってしまふほど疲れる授業だった

「ほんとだよな・・・俺とかバカだから無理・・・死んじゃう〱ルイとアオイはそんなことないと思うけどな」

ケイは相変わらずスポーツ一筋って感じの笑顔で答える

「そんなことないよ〱・・・今日のは ね！？ ルイ」

私たち三人より少しはなれたところで顔に本をかぶせ寝ている・・・ように見えるけれど私は寝たふりだと思ったから問いかけた

「ああ？・・・そうだな・・・」

いつも口数少ないから会話が続かない

「ええ？ルイも？私授業中寝てた」

「だめだよレイカ！！ 少なくとも授業中は寝ちゃダメよ！！」

「は〱い 俺レイカの寝顔見ました〱」

「ったく・・・アオイはまじめだな」

放課後に私たち四人は話をして、日が暮れそうになったら帰るそのくらい仲良し・・・だけどいつもは四人バラバラでほかの人たちと仲良くしている

「つちよ・・・ケイ！！ 勝手に人の寝顔みないですよ」

「寝てたお前が悪いんだろ」

ニタニタしながらケイが答える

正直言つてこの二人お似合いだと私は思う

「そつえばよお・・・もう少しで冬休みだな」

寝たふりをやめてこつちに歩いてきながらルイが言った

「そうですね！ イベントしたいです！」

「俺も」

「あたしも」

「・・・俺も」

「やつぱそれは」 クリパでしょ！」

クリパ・・・クリスマス

ス・パーティー

お似合いさんお二人はすごく嬉しそう

「なんか普通じゃねえか・・・？」

「そうですね？ 私は良いと思いますよ？」

「ん・・・じゃあ変える？」

「あたし 季節はずれの肝試しがいい！！」

肝試し・・・無理！ 無理！ 私超怖がりなんだから・・・

「・・・俺賛成」

「俺も」

「アオイは？」

ケイがポケットからキャンディーを取り出しなめながら聞いてきた

「・・・もしかして怖いのか？」

ルイがニヤニヤしながら聞いてくる

でもみんなに迷惑かけたくないし・・・

「うち・・・違うよ」 ぜんぜん平気です・・・」

だんだん声が小さくなりながらも答えた

「本当は怖いんですよ？」

レイカは幼馴染だからよく分かつてる

「大丈夫俺らついてるから」

ケイが背中をポンとたたきながら言った

「やりたくも無い人を無理やり肝試しに連れて行くのはよくない・・・

・・」

クラスの端っこからすこし枯れた女の人の声が聞こえた

髪型は髪が多いからもさもさしていて牛乳瓶の底のように厚いめが
ねをかけた怪しい女の子がやってきた

「こんにちは」

顔は知ってるけど名前は知らない・・・クラスメイトなのに

それくらい影の薄い女の子が話しかけてきた

挨拶をするのが礼儀だと思うし変な沈黙を作らなくていいと思った
ので挨拶をしておいた

「あなたたち私の事知らないでしょ？」

「しらねえ」

緊張感も無く笑いながら即答してしまうケイ、それが彼のいいところ
でもあり欠点でもあると思う

「私の名前はセイラ 肝試しはしちゃだめよ」

そして彼女はニヤニヤしながら一言、静かに告げた

「A test of a

courage」

2 And she has begun to tell it (前書き)

When I try a test of the courage
gee?

2 And she has begun to tell it

「じゃあ・・・とにかく肝試しはしちゃだめよ」

彼女が振り返り、めがねをクイと直し教室から出る瞬間となりにしたケイが

「おい 何でだよ 理由を説明しろよ」

まるで幼稚園の子供みたいにセイラに話しかけた
クククツ・・・と笑ってからまた彼女は口を開いた

「そんなに知りたいの？」

『この女の子は気味が悪い』

本人以外はそう思っていたに違いない

「・・・明日の同じ時間にココに来てね」

セイラはもう私たちとは反対の方向を見ていたから顔は見えなかったけど

彼女のめがねは手に握られていたのが見えた

そしてその少女はこの部屋を後にしたのだった

～次の日～

「ねえアオイ」

あの少女はいつたい何を私たちに警告したかったのだろうか

「ねえ！！」

「はい？」

考えすぎか？アオイは、レイカの声もろくに耳に入っていなかった
「せっかく人がパン買ってきてあげたのに食べないつもり？」

今日はたまたまだけいつもの四人が集まっている

言うまでもないけれど『アノ子』が言っていることが気になって仕方がないからだった

「ったく・・・同じクラスなんだから普通に話せての」

ちよつと怒りながらケイが口を開く

セイラはきちんと自分の席に座り、自分の昼ごはんを食べている

「そんなイライラするようなことか？　話しかける気は全然ねえけどよ・・・」

「でも行くんでしょ？　今日の放課後あたし気になるんだよね」

アオイはこれ以上かわりたくないと思ったけど好奇心のほう彼女心の心の中では勝っていた

「私は行こうかな・・・」

〈放課後〉

「来てくれたのね・・・」

そこに立っていたのは、セイラではなくとても美しい少女だった

でも枯れた声と、真っ黒な髪がセイラだということをあらわしていた

「まあいいわ・・・話してあげる・・・」

3 The gear begins to turn around fr

ここからはセイラの話している二次元の世界の話になるのでセイラの会話文ですが、「」は省かせていただきます
そして、二次元の登場人物にだけ「」をつけさせていただきます

3 The gear begins to turn around fr

私の名前はアミ

私にはとても仲のいい友達が三人いて

女子は私とミキ

もう二人は男子でキョウスケ、ケント

この四人で冬休みに季節はずれの肝試しをすることになった

冬休みになって待ち合わせは12月28日の夜9：00に校門の前・

・

私はほかの三人とは家が遠いから一人で学校へ行くことになる

冬なのでとても寒かった

日も短かいからまわりも真っ暗だし・・・

本当は肝試しなんてしたくなかったし、一人で学校まで行くのも怖いくらい・・・

でも楽しければいいかな・・・

近所の公園には満月の光で満ちて綺麗だった

その隣をすぎて、静かな細い、人通りの少ない道を通ってゆく

ここは人通りが悪いため、家族はココを通学路を通うのはよく反対していたな・・・

「おーい!!」

手を振ってるミキが見える

夜なのに元気なミキ、怖いものしらずって感じ

キョウスケはおとなしく手を振っている

ケントなんか飴食べてるし

すごい元気な人たちだな。 私は怖くて怖くて仕方がないのに

「怖いとか言ってたけどぜんぜん元気そうじゃん」

ケントさわやかな笑顔のまま私の頭をぐしゃぐしゃに撫で回す
「・・・ペア決めするか？」

キヨウスケは性格が顔には出ないタイプだけど今日はなんか楽しそうに見えた

ペア決めた結果は

ミキ×キヨウスケ

アミ×ケント

となった

先にミキたちが行くことになった

「じゃあいつてくるね」

元気そうなミキと静かにミキについていくキヨウスケが闇に消えていった

「なんか面白くなりそうじゃねえか？」

ケントは笑顔をたやさず聞いてくる

「う・・・うんそうだね・・・はははは・・・」

それに対して私は笑顔が引きつる

・・・

そのころミキたちは・・・

「ねえ アミたち驚かせてみない？」

「はあ？ どうやって？」

「うん・・・じゃあねえ・・・」

ミキはキヨウスケの耳に駆け寄り静かに作戦を言った

「私が『キヤアーーーーーーーーーー！！』って叫んで二人が来たらキヨウスケがいなくなっただって演技するから隠れてね」

「やってみっか」

二人はたくらみの笑みを浮かべた

・・・・・・・・・・・・・・・・

「キヤアーーーーー！！！！！」

ミキの叫び声がした

「ミキの声じゃねえか？」

だんだんドキドキし始める

「だ・・・だイジヨブかな？・・・ミキ」

冷や汗をかいてしまう

「俺行つて来るから、アミはここで待つてろよ」

私は一人になった

暗く、満月の光しか入ってこない場所に一人ぼっちになってしまった

「もうケントは・・・一人にされるくらいならついていったほうが怖くないんだけど・・・」

私は考えた

？逃げるチャンスは今じゃないか？？

逃げてしまえば次三人に会ったときになにか適当なうそをつけばいいし・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おい大丈夫か？ミキ」

心配そうにミキに問いかけた

「大丈夫・・・だけどキョウスケが・・・」

涙を浮かべながら答えた（ミキは女優になりたいとのことで泣く演技ができる）

ケントの背後に駆け寄り

「わっ！！！」

「・・・・・・・・！！！！！」

びつくりしすぎてケントは声が出なくなっている

三人はその後置いてきてしまったアミの所へ行くことにした
.....

「あれ？ ケント アミいないよ？」

「ホントだ いねえ」

「・・・帰ったんだろ？」

そうアミは間違った決断をした

The gear begins to
turn around from here

4 The cat loving becomes the wolf (前書)

A present from Grandfather

4 The cat loving becomes the wolf

「やっぱおとなしく待っていたほうがよかったのかな・・・」

アミはとても後悔していた

あのまま怖い時間を待っていたらスグにみんなと帰れたし、そしてなによりケントについていって一緒にミキを助けに行ったらよかったからだった

行く途中にもあった公園・・・この公園は月明かりが綺麗なことから「げよれいこうえん月夜麗公園」と名づけられている

いつもアミは、悲しかったり、嬉しいことがあった日にはこの公園に来ていた

ここにあるとても大きな大樹があっっておじいさんを小さいときに亡くしてしまったアミにとってはおじいさんみたいな存在だった

この『おじいさん大樹』は最近、公園を工事するときに切られてしまふという噂があっアミは泣いたこともある

それくらい大切な木だった

最終的にその木は公園の中の背の高い草の中に移動された

そのあたりから捨て猫を発見したときは『おじいさん大樹』が送ってくれた『妹』と言い大切に今でも猫を飼っている

アミは後悔したことを『おじいさん大樹』にはなすことにした

「ねえ おじいさん・・・私友達を裏切るようなことをしてしまったの おじいさんは前に猫をくれたよね？ けど猫には話せるようなことじゃないし・・・妹とかほかの友達を頂戴とかは言わないよ！?・・・けど私の話聞いてね」

優しい声で問いかけた

ガサガサ・・・

大樹の向こうで音がした

「えっ？」

アミの心の中はぐちゃぐちゃだった。何の音が分からない怖さとおじいさんの贈り物かもしれないわくわく感・・・

「そこに誰がいるのか？」

そこから出てきたのは

猫でもなければ新しい友達でもなかった

？ただナイフを持ち立ちすくむ体中黒尽くめの服を着た男？

その男はすぐさま私の口を押さえしやべれないようにした。そのうえナイフをつきつけこう言った

「だまっておとなしくすれば殺さないし、暴力は振るわない約束してやる。」

アミは泣きそうになりながらもうなづいた

そして男はもう少し奥まで連れて行った

うつぶせで顔は見えないけれど20代くらいの男性がいた

最初はこの男を見たにもかかわらずその人が寝ていると思った

というより？寝ているんだ？という思いで、心を埋め尽くそうとしたその時ぱつと男が私に目隠しをしながら私に話し始%

5 A friend of Ami of that time

「あゝ！ そつか！」

「でっ・・・でも一応電話しておいたほうがいいよね!？」

「・・・ミキはアミの携帯の番号知ってるだろ？」

アミの友達であるミキ、ケント、キヨウスケはアミを探し始めていた

プルルル・・・

「で・・・でないよ・・・？」

だんだんミキの手と声が震え始めた

「家の番号知ってんのか？」

「うん・・・一応」

プルルル・・・

「はい？」

あせった声で返事をした電話の向こうの声の持ち主はアミの母だった

「あの・・・ミキですけど？」

ミキは片手では手が震えすぎてまともでいられないので、携帯電話を両手で握り締めながら話していた

「ああ・・・ミキちゃん？」

「あの・・・アミ・・・家に帰ってますか？」

「いいえ・・・いま探していて・・・」

ミキは顔が真っ青になった

「だから・・・ごめんなさい。いそがしいので切りますね。肝試しなんてもうしちゃダメですよ！外にいるなら今すぐ帰ったほうがいいですよ・・・なにか知ってることがあったら電話してくださいね」

ブチッ

ミキは力がぬけ、地面に座ってしまった・・・声を出して泣きながら・・・

「おい・・・もしかして・・・帰ってなかったのか？」

「・・・やっぱタマキの言うこと聞いてれば助かったかも知れネエってことか？」

「ああ・・・もうだめだ・・・ダメだよ・・・タマキちゃんの言うこと聞かなかったから・・・」
すでにミキが正気を失っている

「タマキちゃん？ あの影が薄いコだよな？ あの後話し全然聞いてなかった・・・」

「こう言ってた・・・」

「肝試しって英語で『test of the courage』って言うの・・・その言葉は直訳すると『勇気のテスト』って意味になるけどな」

・・・って

「やっぱ肝試し（ゆづきのテスト）をした俺らが間違ってたのか・・・」

6 His thought アミ視点

目が覚めたら目隠しはとられていた

けど口と手はガムテープで止められていた

ベッドの上だったし、足は止められてなかったからスグに起き上がれたし、向こうも私を殺す気は“今は”ないんだとおもう

この部屋は壁も床もひんやりしていてコンクリート造りだった
きつとココは地下かな？

「目覚めたか？」

とつてもかつこいい男の人が立ってた

私がびっくりしているのをよそに

「いまからガムテープをとってやるからな」

やさしく微笑んで私の体のガムテープをとり始めた

「ごめんな。いきなりこんな所つれてこられても困るよな・・・と
り終わったら全部話してやるからな」

手際よくはずし彼は私を見つめて話し始めた

「俺の名前は峰岸 みねぎし 春 はる もちろん『月夜麗公園 げよれいこうえん』の黒尽くめの男は俺
だ」

言い終わると彼は笑い始めた

「ちよつ何で笑ってるの？」

彼は笑いながら答えた

「え？ 普通こんな事言われたらおびえるのにお前おびえないだろ
？」

おびえる？

そんなこと考えもしなかった彼がかっこいいとかそういんじゃない
で・・・

きつと彼がずっと黒尽くめのままでもおびえなかったと思う
なんか・・・彼の優しさを昔から知ってたみたいになんか・・・

「なんで・・・あるとき・・・男の人が倒れてたの？」

「ん？このニュース見れば分かるよ」

この部屋はコンクリート造りで殺風景なのに色々な人が住めるように
家電とかたくさんあった

そしてテレビの電源をつけた

「ええ・・・新しいニュースが入ってきました」

とても緊張した雰囲気のTVニュースだった・・・

「今日未明に20代と思われる男性の遺体が見つかったようです。
死亡推定時刻は昨日の9時以降から12時あたりと見られています。
死因は青酸カリによるもので警察は何者かによる殺害事件と見て捜
査を続けています。」

このニュースが終わると彼は

「音が外に漏れると居場所が分かってしまうのでね・・・」
と言い、電源を切った

「これ・・・犯人はあなたなの？」

迷わず真剣なまなざしで

「そう。俺だよ。できれば春さんと呼んでくれ」

私はこのときちよつとおびえた。けれどほかの人よりぜんぜんおび
えていないと思う

「なんで・・・殺したの？」

だんだん春さんに恐怖感がうまれた

声がだんだん震える

「ん？あの人はあそこの大樹をずーっとずーっと切ろうと思って
た人なんだよ」

私は恐怖感があったもののそれよりも春さんの言ったとおりにな
人が切ろうと思っていたのならはその人への怒りのほうがこみ上げ
てくる

「ほ・・・ほん・・・当なの？」

声の震えがだんだんひどくなってくる

「おいおい、どうした？」

彼は私の隣に座りながら言った

けれど私が何も言わなかったから小さくため息をついてからまた話
し始めた

「本当だよ。最初に切ろうと思ったのもあの人、今も・・・いや、
ついさっきまで斧を振り回し木を切ろうとしていた。いくら止めて
も言うことを聞かなかった」

私はだんだん怒りがこみ上げてきた

おじいさんがこの道に招いたのもきつとおじいさん%8

7 New life ～ハル視点～

「おい 起きろ～チビ～」

大声でしかもアミの耳元で言っただけだ

「わっ・・・な？何？」

アミをからかうと楽しい・・・というかアミが妹みたいでなんか不思議な感覚

俺は一人っ子だから

「いつまでもチビ扱いしないでよね！！これでも高2なんだけど？」
膨れてそっぽ向いてしまった

というか犯人である俺を恐れないアミって一体どんな感覚でここにいるのか？

「大人は、二十歳を過ぎた人間の事を呼ぶんだよ」

からかいながら言った

「じゃあハルは何歳なの？」

真剣・・・というか強い視線で俺の目を見ながら言うてくる

「残念でした～23です。もう大人だからな！」

「むかつく・・・」

「そつだ 朝飯出来てるから勝手に食ってろよ」

俺には俺なりにやることがある

情報収集

テレビは音が外に漏れると厄介だし、携帯は電波で居場所がばれることがある・・・パソコンも同じだが、個人的にパソコンがすきだからパソコンで情報収集

パソコンは「倉本 亜美^{くらもとあみ}」の言葉で埋め尽くされている

きっと警察がアミのことを探し始めた

早くアミを開放してやりたい・・・

けれど俺の仕事が終わるまでは・・・

「ハル」

「なんだ？」

おれはパソコンから目を離さず答えた

「私・・・一生この服着て生きていくの？そんなの嫌！！ぜつつつ
たいに！！」

忘れてた

ぜんぜん考えてなかった

こういう気の緩みがアミを傷つけてしまっただよな・・・

「家に取り替えるか？ 服以外にもココにはないけどアミには必要
なものとして来い」

作戦なんてない

別に隠れてとりに行けなんていわない

アミを信じてるから

「なにそれ？私が普通の生活に戻っていいってこと？ それも嫌」
ほんとにアミの考えてることって分からない

「どういう意味だ？」

とっても興味があつたからアミの目を見て真剣に話した

「え・・・だってさぁ・・・いつもの生活に戻るよりこの生活
のほうが面白そうだからしばらくはいさせて！！」

「じゃあ作戦考えるか？ アミの新しい生活のために・・・」

「やったー！！」

作戦はこうだ

？ 夜にアミが家に帰り必要なものをとってくる

？ アミの家の前に俺がナンバープレートを取ったバイクに乗って
まっているからアミが後ろにのる

？ この地下室に帰ってくる終了

そんな簡単に行くとは思ってないがこれもおじいさんのための仕事だと思えば軽いものだ
けどアミの目隠しを取るタイミングとつけるタイミングを考えなくてはならない

「わゝなんだか楽しそう？」

キラキラした瞳で聞いてくるアミはとても可愛い

「今夜だ！ それまでに持ってこなきゃいけないものメモにまとめとけよ？ それじゃないとつれていかねえからな」
「はゝい」

今夜の仕事はいそがしくなりそうだ・・・おじいさん
こんなに可愛い妹のような少女に出会えたのもおじいさんのおかげだね・・・

8 Big work 〈アミ視点〉

「よしっ できたぞ」

「なんで目隠しするの？」

「ここがどこかアミに分からないように・・・そんなのも分からないか？」

私は別に逃げようと思ってないのに・・・用心深すぎる

私はハルにやさしく手を引かれバイクの後ろにのせられてヘルメットもかぶせてくれた

「しっかりつかまってるよ 危ないから」

静かにハルは一言言っ

私の家に向かった

「お前の家どこだ？」

「『月夜麗公園』げよれいこうえんを北に進んで・・・」

「了解」

誰にも分からないように真夜中に出発したから今は一時四十五分・

・
周りが見えない私はいろいろなことを考えた

けれど一番考えたのは家からとってくるもの

わがまま言っただけが失敗してハルを困らせたくない

「ついたぞ ここから声や物音出さな・・・バイクの音もなるべく静かにしておくから」

ハルは小さな声で言いながらヘルメットと目隠しを静かにとった

私が話そうとして口をあけるとハルは私の口を押さえた

「さっき言っただけ覚えてないのか？」

はじめてあったときと同じ怖い目だった

連れて行かれたときに着ていたコートのポケットから鍵を出し静かに家に侵入した

静かに服とくしとか携帯電話・・・は、ハルが使っなくなって言うと思っけど一応持つていく

外にでて家の鍵を閉め

？お母さんお父さん、これは私の鍵です。帰ってくるまでなくさないようにとっておいてください？
というメモと鍵をポストに入れておいた

「目隠しするから目つぶってるよ」
私は目をつぶると家の電気がついた

「やべっ」

いつもは冷静なハルもちよつとあせってたけどちゃんと間に合ったしハルの後ろに乗った
帰る途中でハルの背中が暖かくて眠ってしまった

朝目が覚めた後、携帯でニュースを見た
ハルに携帯は禁止されてるけど一日3分ならという許しが出たから見た

「高校2年生少女行方不明事件の新しい情報が入ってきました。」

朝、倉本亜美の家のポストにメモが見つかり、筆跡鑑定の結果、
亜美さん本人のものと分かりました」

「はい3分経ったから没収！大丈夫俺アミの携帯興味ないから」
私の携帯を取り上げながら言う

「いいの？メモなんか置いてきちゃって？」

「ああ・・・いいんだ警察にヒントをあげるんだ。けどそんなに簡

単に捕まる俺じゃないぞ」

初めて犯罪を犯した人の発言とは思えない

私はどうしても知りたかったから朝ごはんを食べているときに切り出してみた

「ハル・・・昔話の続き教えて？」

「あ？ いいよ」

「俺は濡れ衣着せられて警察から逃げてたことがあった」

そっぴい終わった瞬間思った

だから簡単につかまらない俺なんだ

「死刑囚だったけれど、濡れ衣以上に最悪なものなんてないと思つて脱獄した

公園にある木の陰に隠れた。そしてその茂みで一週間すごした・・・公務執行妨害でつかまったけど濡れ衣は茂みで過ごしている間に晴れたから今生きてる」

やっぱ悪じゃんハル・・・

「だから俺はあの木を守るって決めたんだ」

私がハルを恐れない理由が分かった

おじいさんを好きな人はみんなつながっているから・・・

「私も・・・おじいさんに色んなものもらった・・・おじいさんに出会ったから今・・・ハルとここにいる」

「そっぴいな・・・」

二人とも恥ずかしくて・・・新しくって・・・なんか変な感覚だったから黙ったままだった

9 The life that I am not used to

その日の昼食後、アミが倒れた
皿を片付けている途中に

ガシャーン

と大きな音が鳴った

「アミ？」

ハルは心配になって台所に行くとアミが倒れていた
すぐに駆け寄り声をかけた

「おい、アミ！大丈夫か？」

すごい汗をかいて顔も赤い

ハルが手を額に当てるとすごく熱かった

「すごい熱・・・」

ハルはアミを抱きかかえベッドに寝かせ落とした皿を片付け氷を持
っていった

アミはしばらくしてから目が覚めた

隣にはパソコンをしているハルが見えた

起き上がるうとすると

「起き上がるな、おとなしくしてろ」

「うん・・・」

アミはもう目が覚めていたけれど頭がふらふらするし、ハルに怒ら
れるから目を開けたままベッドに寝ていた

「ハル・・・今何時？」

ハルは遠くの時計を見てから

「・・・夜の七時だ」

「あれ？私・・・なんでココにいるの？」

アミは熱が高かったから思い出せなかった

「昼に皿付けてたら倒れたから・・・6時間ちよい寝てたんじゃ

ねえか？」

「ふうん・・・ってここまでハルが運んできたの？」

ちよつとあせった様子でアミが聞いた

「なんか悪いかな？」

ちらつとアミを見ながら言うときまたパソコンに目を向けた

「お・・・重くなかった？」

「そんなの今どうでもいいだろ？」

ハルが頭を抱えたため息をつくとき、アミの額に手を当てた

「ひゃっ・・・」

ちよつとびっくりした様子でアミがあせる

「なにびっくりしてんだ？・・・37・6度くらいってどこか？」

アミは何も言わずじっとしていた

「夕飯食べるかな？」

「・・・うん」

ハルは夕飯を取りに行った

夕飯はおかゆだった

熱の高いアミをきづかっておかゆにしたのでしよう

ハルがおかゆをスプーンで一口分すくってから

「くちあける」

「はい？『あーん』しなさいと？」

「そうだけど？なんか文句あるかな？」

真顔で答えるハルがアミにとってにはちよつと不思議だった

「文句あるに決まってるでしょ？ ご飯ぐらい一人で食べられるよ！？」

ハルは一度スプーンをおいてから答えた

「右手見てみる」

アミが右手を見ると包帯が巻かれていた

「なにこれ？」

「皿で手を切ったのも覚えてないのかな？」

アミが自分の手を握ろうとすると激痛が走った

「いたっ・・・」

「バカ 傷口開くだろ？ だから言ってんのによぉ・・・自分で食えないって・・・」

ハルは笑いながらため息をついた

「いつ・・・いいもん！左手で食べるから・・・」

意地を張りながらアミは答えた

「はしどうやって使うの？右利きなのに？そのうえどうやって皿持つんだよ」

アミをちよつとバカにしている

「・・・分かったよしょうがないな・・・」

そいうとアミは口をあけた

ハルはちよつと笑いながらアミに食べさせた

食べ終わるとハルは

「風邪は寝てれば治る。だから早く寝ろ」

きつぱりそういうと後片付けを始めてしまった

「じゃあさぁ・・・風邪治ったら料理教えて？」

いつも通り手を休めず、アミに視線を向けず

「お前料理できるだろ？だから教える必要ない」

「だってさ・・・ハルの料理美味しいから・・・」

「料理関係の仕事してたからな」

アミは料理関係の仕事しているなんて思ってたからとても驚いた

「・・・凶器がその料理店の包丁と同じで俺が疑われて死刑囚になっただってワケだ・・・」

「ふゝん・・・けど料理教えてね！」

「分かったから早く寝ろ。病院連れていけねえんだから」
「うん」

アミがこの生活に慣れるにはちょっと時間が必要・
自分に合わない生活が風邪の元だったのでしょう

10 A s e c r e t o f H u l l (前書き)

顔文字が含まれてきますので、縦書きで読まれている方は横書きで読まれることをおすすめします。

10 A secret of Hull

アミは夜中の二時ごろ目がさめた

やっぱり隣でハルがパソコンをしていたけれど・・・

電源がついたままで、ハルは眠っていた

アミから見たらパソコンの画面が見えなかったから、まだ足がふらついたままでハルを起こさないように画面を見た
どうやらブログを書いているようだった。題名は

『A tree of God』

日本語に訳すと「神様の木」

もう少し下まで見て見ようと思った・・・けど

「んっ・・・」

ハルが目を覚ましそう

「わっ・・・」

アミは一度その場から一步離れて様子を伺った

ハルはまたそのまま気持ちよさそうに眠ってしまったので、ブログを下まで見てみた

『月夜麗公園の木』の隣おじいさんにいるハルの写真があつて

『この木はボクの命の恩人です。いつも気持ちが安らぎます^^』

と書いてあった

このブログをみた人からのコメントに

『最近写真少ないけどどうかしちゃったんですか?』

本当は警察から逃げているけど・・・

『色々いそがしくつて>< 最近、この大樹の事知っている少女に会ったからその子に許可取ったらその子にもこの木について語ってもらおうと思っています！ 写真はなくても書き込みはするつもりですのでよろしくお願いします^^』

顔文字はともかくハルの敬語は始めて見たからアミはちょっとびっくりした

「ん？」

ハルが目を覚ました

「あっ・・・」

「読んでたのか？」

ハルが微笑みながら聞いてくる

「うん・・・まつ・・・まあ・・・」

アミはあせってたけどハルはそんな素振りを見せないのなるべく平常心を保っている

「俺の寝顔可愛かった？」

また笑顔で聞いてきた。きつとふざけてる

「そっ・・・んなのどうでもいいじゃん」

アミが急いで目をそらす

「んーっ・・・」

ハルは伸びをして大きくため息をついた

「夜中って静かだよな・・・」

「う・・・ん」

アミは目をそらしたままだった

けれどハルは立ち上がってアミの額に手を当てた

「・・・36・8 くらいか？ もうちよつとで熱下がりそうだからまだ寝てろよ」

アミはハルとどうしても目をそらしたかったからうつむきながら静かにうなずいた

ハルはちよつと笑顔を見せてアミの頭をなでると、パソコンの電源を落としていた

「ハル？」

「何だ？」

二人は目を合わせないまま、背中を向け合ったまま会話を続けた

「・・・やっぱ・・・なんでも・・・ないや」

ハルには見えていないけれどアミは作り笑顔を見せてからベッドに腰掛けた

「なんだよそれ・・・言うことないなら話しかけるなよ」

夜中の静けさが二人の静寂を、より静かに引き立てる

「・・・ミルクティーでも飲むか？」

「ん・・・」

静かにうなずいた

ハルがキッチンに準備を始めた

「ねえ・・・ハル？」

お湯を沸かし、笑いながら

「『なんでもない』とかいうなよ？」

「明日も自分じゃご飯食べられないかな？」

手を休めてから

「自分の手を見てから考えろ」

アミは自分の手を見た

ギュッと握り締めようとしたけれど途中でも痛かったからやめておいた

「ダメそうかも・・・」

ハルはもう準備が終わってアミの隣に座った

「大丈夫だ、俺がついてるから」

今度は二人とも目をそらしたりしなかった
見つめあったまま、夜中の静けさが二人の時間を止めたままのよう
にする

お湯の沸いた音がした

ぱつと二人とも目をそらしてしまった

アミはちよつとドキドキしながら自分のベッドを見つめた

ハルも同じだった・・・けど

「お湯沸いたからちよつと行って来るな・・・」

ハルが立ち上がるうとしたけれどアミがハルの腕を目をそらしたま
ま掴んだ

「なんだ？」

ハルはちよつと不思議そうだった

「・・・もうちよつと・・・もうちよつとだけ隣にいて・・・」

アミが静かな声で言った

「お湯だけ止めないと危ないから・・・な？止めてきたらいつまで
だつてアミの隣にいてやるよ」

アミはハルを真剣に見つめながら

「本当に？本当に？・・・ずっと私の隣にいてくれる？」

「何甘えてんだよ？ マジでちよつと・・・火が危ないって・・・」

ギョッ

アミはハルに抱きついた

「わっ？ なんだよ？」

「・・・何も言わないで・・・」

ハルはちよつと困った顔つきで

「おい・・・俺の罪また増やすつもりか？ 未成年と二十歳を過ぎ
た人が恋に落ちても罪なんだぞ？」

アミはちよつと強い口調で言った

「だから何も言わないで・・・」

火はついたままだった
そして夜中の静寂が流れた

11 The last decision

「おい・・・離せよ・・・」

ハルがちよつと呆れた様子で言った

「う・・・」

アミはもつと強く抱きしめてくる

「火だけ危ないから・・・な？」

アミはちよつと考えてから『しょうがないなあ・・・』と言わんばかりに、ふてくされながらハルから離れた

「ありがと」

アミに目を合わせずキッチンに行つて火を消した

ハルが歩いて帰つてくると

「ハル・・・」

またアミが抱きついてきた

「さっきから何甘えてるんだ？」

アミは抱きついたままハルを見上げ答えた

「なんで私がギューつてしてあげてるのにハルはギューつてしてくれないの？」

答えになつてないし・・・

「それはな・・・アミは高校生だからファーストキスのに・・・俺がお前に抱きついちゃったら・・・なんか・・・」

アミが見上げたままちよつとムスツとしながら

「なにそれ？私に気を使つてるの？」

「うん・・・後悔してからじゃ遅いぞ？俺もなあ・・・高校通つてねえからちゃんと通つてるアミはちゃんと高校生活満喫しろよ」

笑顔でアミをなでながらハルが言った

「いやっ・・・だって初恋の人にギューつてしてもらえないなんて悲しいでしょ？」

「知らねえよ・・・」

アミはハルから離れようとしな

「しょうがないなあ・・・そんなに俺のこと好きなのか？」

ふざけて笑っているけどアミはそれでもよかった

「うん」

アミは目をそらした

「じゃあそれがアミの願いなら・・・まあ“出来るだけお前の自由にしてやる”って約束したしな」

そっぴい終わるとハルはアミを優しく抱きしめた

「あつそっだ！ハルって彼女いたことないの？」

「ない。別に興味なし」

きつぱり答えた

「じゃあ私は？」

ハルがニツと笑ってから

「ちよつと興味アリ」

「そっぴいえばアミまだ風邪治ってないだろ？ 早く寝ろ」

「分かった」

アミはハルに甘えながら言っつと、ハルから離れた

そしてアミはすぐ眠りについった

アミはちよつと早く目覚めて、地下室中を歩き回った

ハルの部屋・・・といつてもドアはなく、アミはハルを起こしにいった

「ハルゝ起きろ」

ほつぺをぶにぶにしながら起こした

「ん？・・・アミか・・・はよお・・・」

ハルは伸びをしてからアミの熱を測った

「よし もう平熱だから寝なくていいよ」

ハルが笑顔で答えるとアミも笑顔になつた

するとハルがちょっと真剣な顔つきで言った

「俺さあ・・・出頭しようかな」

アミがハルのベッドに腰掛けながら

「なんで？」

「逃げる理由がないから・・・それにアミを開放してやりたい」

ハルは自分の手を見つめ

アミはハルの顔を見つめ

「いや・・・そんなの・・・：ハルの隣にいたい」

12 A parting plan

「いつかは出頭する日が来る・・・それが早くなっただけだ」

ハルはベッドから出て、机の上にあるペットボトルの水を一口飲んだ

「料理教えてくれるって言うのも嘘？」

「俺だって立派な犯罪者だ。1つくらい普通に嘘つくよ」

ハルの顔は影で見えなかった

ただ、ペットボトルの中の水が電気の光で輝いていた

「ごめんな・・・教えられなくて」

アミと目をあわせようとしなかった

ずっと床を見たままだった

「今日出頭計画話すからメモ取るなり何なりしろよ・・・」

黙ってキャップを閉め、机の上におくと部屋からハルは出て行ってしまった

アミも部屋から出て自分の部屋で着替えをした

コンコン

アミが着替え終わって本を読んでいるとハルがやってきた

「入るよ」

そう一言言ってからハルは入ってきた

目を合わせるのが嫌だったからアミは本から目を離さなかった

「出頭計画話すからちゃんと聞いてるよ。1つでも間違えたら・・・

俺とアミは会えなくなるからな」

アミは気分が優れないままハルの話をきちんと聞いた

「ああそつだ、実行日は明日だからな・・・アミを早く開放してやりたいから」

「次の日」

アミは携帯で警察に連絡した

「あの・・・女子高校生誘拐事件被害者の倉本 亜美です・・・」

「え？・・・本当に倉本亜美さんですか？」

「はい。住所を教えるので来てください・・・・・・・・・・」

電話が終わると

「俺が刑務所に入ったら文通してくれないか？」

アミは笑顔で答えた

「いいよ ハルが望むなら」

「本当にアミって変なヤツだよな。最初から思ってたけど・・・犯罪者の望むようにしたりとかさ・・・」

ハルは笑いながら言った

二人は警察が来るまで絶えず話をした

ドタドタドタ

警察の足音が聞こえ始めると二人は話をやめ、計画を一人ひとり心の中で振り返った

「手を上げる！」

そういつて拳銃を持った警察が入ってきた

ハルはおとなしく手を上げた

警察の中でもいかにも偉いですよ

という感じの人が

「あなたが倉本 亜美さんですね」

と、アミの手を引いた

そのあとアミは警察の手によって保護された

アミはハルのことを見なかった

ハルの命令を守ったからだった

けれど音を聞いていると、ハルは警察に抵抗はしていないようだった

13 Solar light

久しぶりの太陽の光を浴び、アミは監禁生活の幕を閉じた。

今までと同じ、普通の高校生に戻った。

ミキ達とも今までと変わりの無い生活を送っているように見えた。

アミは、監禁生活を過ごした時間と同じ大きさだけ心に穴ができたみたいだった。

「アミ？私の話聞いている？」

その言葉がアミに沢山降り注いだ。

でもアミには、新しい趣味ができた。

文通と料理

色々な料理を沢山つくっては、写真を撮って文通相手の手紙に入れて評価してもらうのがアミの日常。

文通相手は、刑務所にいる女子高校生監禁事件の容疑者

「^{ミネギシ}峰岸^{ハル} 春」

彼は、生きがいと言う名の仕事を終え、監禁生活を終了させた「自分勝手」な男だった。

アミはハルと恋に落ちた。

それがアミの心の穴。

アミは、ホームルームの時間、クラスの人ができるかぎりの監禁生活の日常を話すことになった。

「アミ????ごめんなさい」

3人に謝られて少し戸惑った

「うっん いいって、先に帰った私が悪いから???」

クラスメイトからも、

「可愛そう」

とか、そんな囁きも少なくは無かった。

クラスのある女子が、

「監禁生活じゃガムテープとか紐とかで縛り付けられてたの?」

「ハルは、そんな人じゃない!!!」

そう言いたかったけど、そんな事言ったら、ハルの出頭計画は台無しになってしまうから

「そこまでじゃないけど厳しかった。」

と、答えるしかアミには出来なかった。

ハルを悪役にするような言い方を続けたアミの心は、穴だけでなく、まるで鋭いナイフで切り裂かれたような傷もできた。

アミにとってハルは、兄のような存在で???そう思っているうちにハルは、兄から王子様になってしまっただけ???

お姫様には、王子様を悪人呼ばわりするのが苦しかった。

お姫様は学校意外はほぼ、外出を禁止され、ただの飼い慣らされた子猫みたいになってしまった。

つい最近まで、とっても怖い狼と過ごしていたのに???

ピンポーン

「こんにちは」

笑顔で軽くお辞儀をしたミキの後ろには、ケントとキョウスケが立っていた。

「どうぞ上がってください」

スリッパを用意する母は、嬉しそうで???私は、3人を二階の私

の部屋に連れてきてから、下のキッチンに行ってお菓子や、お茶を母とつしよに用意していると

「アミは、キョウスケくんと、ケントくんは、どっちがタイプなの？」

微笑む母は、ちょっと若く見える。

「秘密」

ウインクしてから、部屋に向かう途中に、アミは、

（私はハルがタイプです）

と思った。

部屋に戻ると、4人でトランプをしたり、話をしたり???すごく盛り上がった。

気付くと、日が沈みはじめていた。

「じゃあ私とキョウスケは帰るけど、ケントも帰るでしょ?」

「んー???家帰っても誰もいないから???残ろうかな?」

「ふーん???じゃあ帰るね!おじゃましました。」

2人は帰ってしまい、ケントとアミの二人っきりになってしまった。

「アミさあ???」

「ん?」

ケントは、アミを真剣な目で見た。

そしてアミを優しく抱きしめた。

「ケント?」

「俺???アミのこと好きだから???」

アミの温もりを感じて数秒後、アミは

「あつ」

つと窓を見ていった

俺は背中を向けていたから分からなかったけど…アミから離れ、窓を見た。

窓の外には、男の人がいた。「誰？」と問いただそうと思ううちにアミは窓を開けた。

俺には不審者にしか見えないけど・・・アミとどのような関わりのある人が、少し気になった。

「あゝありがとね」

笑顔を見せながら彼は入ってきた。

この人自体だけみると、不信感はないけど…窓から入ってくるとかどう見ても怪しいんですけど・・・

アミも笑顔だからまあいつか…ってやっぱよくない？

「こんにちは」

この笑顔で人柄を複雑になって、もう頭がおかしくなりそうでも挨拶されたからには返さないわけにも行かないんで…

「こ・・・こんにちは」

「二人とも静かにしててね？ちよつとでも大きな音たてたら…」

そう彼が言いかけたときはアミが「分かってるよそんなの」と笑顔で駆け寄る

つてことは白。

不審者ではない。

「つてそれよりなんでこんなとこにいるの？」

こんなとこつてなに？

不審者は無しとして…怪しいんですけどこの人。

「え…アミに会おうと思って脱獄してきた」

脱獄う？

ていうかこの人真顔で『脱獄』とか言っちゃってるんですけど？

不審者じゃん

犯罪者じゃん

黒じゃん！！

アミ普通に話してるし…こんなに危ない橋渡っちゃって大丈夫なのか？

「だめじゃん！ちゃんと罪を償わなきゃ」

アミがちよつと叱って言っ

「あんなによくしてやったのに【罪】なんていつの？いつからアミちゃんはそんなに意地悪になったのかな？」

「アミが好きとかどうとかじゃなくて…誰ですかこの人？」

「はいはい…負けましたよ。ハルさんにはかないません」

ハル？

春？

えーと…なんか聞いたことあるな…

「あゝキミも大変だねゝこんな無愛想な女の子と仲がいいなんて」

この言葉はスルー

今の俺の脳内は、検索ワードを『春（人名）』として、記憶を探しまくっている途中だから…

峰岸春？

峰岸春って…アミ監禁した人じゃん？

アミと峰岸春（？）の喧嘩をよそに、彼に話しかけた

「あの…失礼ですが、あなたはもしかして『みねぎし峰岸 はる春』さんですか？」

「正解！」

なんかこの人テンション高いんだけど

なんか犯罪者確定なんだけとお？

俺は携帯を取り出して、警察に連絡をしようと思った。

「連絡したいならどうぞ。止めないんで」

笑顔と真顔しか見せないし。

止めないってどういうことだ？

それどころか、俺の指のほぅが止まってしまった。

「やっぱこういう風に言ったら人って電話やめるんだね」

なんかム力つくこの人。

犯罪者で

脱獄犯の癖に平常心っていうのがイライラしてくる。

ここで怒っても向こうから今のような言葉が帰ってくるだけだ・・・

「あ！ そうだそうだ！ アミに伝えなきゃいけないことがあったんだっ！」

今更？

「俺、明日あの世へ旅立つんで」

だからその真顔がム力つくんだよ...

「え？ ねえやだ！ 料理教えてくれないと死んじゃだめ！」

犯罪者にこんなに人がなつくとは思えない。

動物扱いしてアミには失礼だけど。

「だ〜か〜ら〜・・・お前人の話し聞いてんのか？ ていうか充分うまくなっただろ？ 手紙の中入ってたし」

手紙？料理？

もう意味分らないんだけど...

「いや！ ハルが犯罪者でも教えてもらうの！」

「なんだよ。俺の言ったこと覚えてるじゃねえか」

もう話はいれない。

俺は完全に仲間はずれ

「なんで死ぬの？ 方法は？」

「俺の任務を果たしたし・・・方法はこれ」

ニツと笑みを浮かべながら言う姿が憎たらしい
彼の手には、小さな袋に入った薬品的なもので…

「あのおじさんを殺したときのあまりでしょ」

ちよつと怖い目つきになった

「正解！ よく分かったね」

アミは彼の今までの事件と深く関わっているようだ。
すごく危険な少女だな。

まあもとはと言えばアミを一人にした…

って俺が悪いのかあ！！！！？

彼はアミを軽く抱き寄せてから

「ついてくる？ それとも残る？」

彼は笑顔を絶やさなかった。

15 A game of the life

「行くに決まってるでしょ……。」

ハルに抱きしめられたアミは、ちょっと頬が赤かった。

「そういうことだから。キミは警察に言うなり何なり勝手にしていいから。」

ケントはまだ何も言えず、アミも黙ったままだった。

そのまま、ハルはアミを連れて窓から出ようとすると、ケントが口を開いた。

「……アミを殺して自分も死ぬって言うのかよ。」

「そうだよ？ でもアミは、それに同意していることを忘れないでね。」

「おい！ アミ！？ それでいいのかよ」

アミは振り返らず答えた。

「私は…それでいいの。ハルと一緒にいたいから……」

「…だつてさ…じゃあさあ、鬼ごっこしない？」

ハルは笑顔だった。

「俺は、アミと逃げるけど…キミは、警察なり、アミの家族なり…」

とにかく人間を集めてもいいし、俺たちを捕まえたらキミの勝ち。
けど、今は・・・五時だから・・・今日の夜八時半、までに捕まえな
いと君たちの負け、俺たち死ぬから。」

「はぁ？」

「ハル？ そ…んな…？ 命をかけたゲームってこと？」

コンコン

「二人以外に誰がいるの？」

アミの母の声だった

「じゃあ、スタート！」

ハルはテンションが高かった。

16 Kitten and wolf

外にでると、窓からはアミの母がアミを呼んでいる
そんなことをよそに、ハルは、

「さぁお姫様、走りますよ!」

「わわっ…」

アミは、がんばってハルについて行った。

近くの海に來ると、日が沈みかけていた。海は夕日に照らされ赤、
オレンジ、青のグラデーションが綺麗に輝いていた。

「もちろんあの場所だね。」

「当たり前」

「…なんで残らないで俺についてくるって言うてくれたの?」

「だって、やさしいハルのこと…大好きだから…。」

二人は一度立ち止まった。

最初は目を合わせないでいたけど、振り返った瞬間が同時だったか
ら…目が合った。

「俺は、やさしくなんか無いよ?　だって犯人だもん。」

ハルは、アミにキスをした。

「んっ!？」

アミはびっくりして目を開けていたけれど、そのあとゆっくり目を閉じた。

ハルがアミから一旦離れると、

「アミ…愛してる」

「ハルは、大好きなほうがぴったりだよ？」

ハルより背の低いアミは、背伸びをして、またキスをした。

「アミは、この海より綺麗だから…」

「ハルのお世辞は要らない！　ただ…大好き…それだけでいいの・
…」

「わがままだな…最初から最後まで…」

「…バカ…」

「アミ大好き」

そういつてアミを抱き寄せた。

「彼氏に抱かれたときも、こんな感じだった？」

「彼氏じゃない!!!　私の彼氏はハルだからね！」

「よく言ってくれました。」

「ハルのバカ……！」

「ごめんごめん」

アミの頭を優しく撫でた後

「じゃあ逃げようか……。」

お姫様の手を引き、また走り始めた。

17 The winner 〈前編〉（前書き）

軽く残酷な描写アリなので気をつけてください。

17 The winner 〈前編〉

二人は月夜麗公園の茂みにいた。

「…八時二十分…俺らの勝ちだ。」

「そうだね…」

日は沈み、真っ暗な闇の中で八時半になるのを待った。

「ちよつとのど渴いたから、水飲んでくるね。」

アミは近くの水道で水を飲んだ。

「私の寿命も…後十分…」

茂みに戻ると

「ここら辺も警察がうるついている…もうここから一歩も出るなよ」

命令はアミにとって慣れっこ。

「そこにいるのは分かっている！ おとなしく出てこい！」

警察の声がする。

心臓の音は、早まり、頭が真っ白になる。

「…つばれたか…。」

「峰岸春！！ 兄を殺したのはおまえだな！」

そう叫びながら入ってきた警察は、アミの家には何度か、監禁事件について色々聞かれたときにやってきた警察だった。

「やつ…山本さん！？」

「アミちゃん？ 何でこんな所にいるんだ？」

「自分の意思で…」

ハルは平常心を保っているようで、（というか警察に慣れてるだけ）時計を眺める。

「八時二十五分」

「絶対にお前を許さない」

この公園にいる人物は、

ハル、アミ、山本の三人

山本はハルを憎しみの目で見ている。

「どうしたんですか？ 山本君？ お兄ちゃんの後をついで…大きくなったね！早く捕まえないと八時半になっちゃうよ？ まあどっちにしても…」

ハルの言葉が終わらないうちに、山本はハルを拳銃で撃った

「兄を裏切ったお前を絶対許さない」

「ったく…顔かすったじゃねえか…やっぱり教えてくれなかったよな…人の話は最後まで聞けって…お兄ちゃんに。」

「ねえ？ ちょっと…ハルは山本さんたちと何かあったの？」

18 The Winner 中編 くアミ視点 (前書き)

これも残酷な描写が入ってきますので、注意してください。

18 The winner《中編》くアミ視点く

「コイツは俺に濡れ衣を着せた犯罪者の弟だ。そいつのせいで俺は死刑囚になった。」

「違う！ 兄はそんなことをしていない！」

山本さんは拳銃を構えたまま…

どっちを信じたらいいの？

普通の人なら、警察と犯罪者が戦っていたら警察を信じるでしょう…
けれど私の初恋の人を裏切るわけには行かない…

「アミちゃん！ こっちにおいで」

「アミ、俺を信じろ。」

携帯の時間を見た。

八時二十九分

「ハルも、山本さんもやめて！ 後一分で…」

一分…

後一分で、この公園には最高三人の血が流れることになる。

………

『俺さあ…お前のことうざいんだよ…峰岸』

『なんでだよ?』

頭をかきながらめんどくさそうな山本の兄。

『俺より後にこの店に来たくせに、お前の料理のほうが人気があるのが』

『そんなの実力の問題だろ?』

『だからね、キミの包丁で料理長を、お料理してみたんだけど…俺より料理の上手い君なら評価してくれるよね?』

『・・・』

『遺体を、なるべく無残な感じにして置いたから…きっと遺体が見つかるのも時間の問題だよ?』

・・・・・・・・・・

「料理長を殺した兄をよくそんな風に言えるよな。俺より料理が下手なのは当たり前なんだよ！ 元警察なんだからよ！」

ハルの目が怖い…

元死刑囚の目が怖い…

「お前だって兄を殺した！ 人殺しに変わりはない！」

「俺は殺したが濡れ衣など着せていない！」

私はどうしたらいいの？

友達を裏切って、逃げて、元死刑囚の人殺しに監禁され、生活をと
もにし、犯人の言いなりになって、今だって迷ってはいても警察よ
り犯人を信じてる…

・・・今何時？

19 The Winner〈後編〉〈アニメ視点〉（前書き）

18と同様です。

そして、途中から、セイラの話に戻ります。

19 The winner〈後編〉／アミ視点

・・・八時三十分!!!

「ねえ…八時半になったよ…」

「そうか…」

ハルが、少し気を抜いた。

パンツ・・・

公園に銃声が鳴り響く…

・・・

「ごめんなさいね、日が暮れる前に話し終わると思ったら、長かったわね…退屈だったでしょう？」

アオイは、咳払いをして姿勢を正しながら

「いいえ…でも、ハルさんは…」

「ええ、あのゲームに勝ったのは警察達…ハルはこの世に存在しない」

ケイがちょっと好奇心を秘めた目で、

「アミはどうなったの？」

「そのあと、ハルの青酸カリで自殺したの」

ルイが、

「なんでお前はこんな物騒な話してるんだ？」

「あれ？ 私の名前教えなかった？」

「え？」

「『山本星羅』^{やまもとせいろう}これが私の名前」

19 The winner〈後編〉〜アミ視点〜（後書き）

本日を持ちまして、「子猫さんと狼さん」を終了させていただきました。

この作品は、もちろん妄想の中で生まれたのですがかなり変わっているの、踏み切りのように、？情報をお伝えしたいと思っています。

そして、気が向いたら外伝も書こうと思っています。気まぐれなので、まだよく分かりませんし、この作品を読んでもさっている人がどれだけいるか、どれくらいの方々に愛されている作品なのか分かれれば書きたいと思います。

今までご愛読していただいた皆様。
ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8205p/>

子猫さんと狼さん

2011年2月14日12時35分発行